

対人援助職にとって共感性と攻撃性は必要か

巖 岡 幸 一*・鎌 田 次 郎**・亀 島 信 也**

Are empathy and aggression needed for workers in the human services fields?

Koichi Warabioka, Jiro Kamada and Shinya Kameshima

要旨：本研究の目的は、大きく2つの点を検証することであった。第1点は、対人援助群と対照群の間で共感性および攻撃性の比較を行うことであった。第2点は対人援助群において、情動的共感性と攻撃性が安定した特性であることを明らかにするため、過去の調査結果との比較を行うことであった。

結果、対人援助群は対照群と比較して、共感性の高さが明らかとなった。攻撃性においては、特性的側面と行動的側面の2つの側面によって結果は異なり、特性的側面としての攻撃性は対人援助群にもみられ、行動的側面では攻撃性が低いと考えられた。そして共感性と攻撃性の関係においては、対人援助群の攻撃性の低さと共感性の高さが明らかとなった。

過去の調査結果との比較からは、対人援助職を希望する学生の共感性および攻撃性の安定性が推察された。

Abstract： The objective of the present study was to compare differences empathy and aggression between workers in the human service fields (main group) and workers in the commercial fields (control group).

The main findings were as follows: (1) As for the main group, sympathized height became clear compared with the control group. (2) Aggression as a characteristic side was seen by two sides on a characteristic side and acted side also by the main group in aggression differing as for the result, and it was thought that aggression was low on acted side. Moreover, in the relation between sympathy and aggression, a low degree of the aggression of the main group and sympathized height became clear. (3) The student's sympathy that hoped for the human service employment from the comparison with a past investigation result and the stability of aggression were guessed.

Key words： 共感性 empathy 攻撃性 aggression 対人援助職 workers in human services fields

I 問題と目的

人間には他者の感情を共有したり、他者の苦痛を軽減しようとする傾向が生得的に備わって

いるといわれる（齋藤・登張、2002）。つまり、われわれには共感性が生得的に備わっているとされる。また、攻撃性に関しても、比較行動学や社会生物学の理論では包括的適応度の概

*神戸医療福祉専門学校 講師（関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科心理臨床学専攻 修了生）

**関西福祉科学大学社会福祉学部 教授

念に基づいて、自身の生存と生殖を目的に、生得的に備わっているものとされる。

社会福祉や心理臨床などの職域で対人援助職として働く者には、共感とは重要な概念と考えられてきた。社会福祉および心理臨床場面で用いられる「共感」や「共感的理解」は、それぞれ立場や理論によって語句の表す意味や定義は異なる。しかし、これらは特性としての「共感性」に基づき、内包された概念や技術であると考えられる。林・河合 (2002) および橋本 (2005) によると、心理臨床学では、Rogers は人格変容のための必要十分条件の 1 つとして「治療者の共感的理解」(Rogers, 1957) をあげ、カウンセリングや心理治療における面接過程で、共感や共感的理解は重要な意味を持つとされている。また社会福祉学においても、パイステックの 7 原則に挙げられる「受容」や「非審判的態度」といった、クライアントを共感的に理解することがケースワーカーには重要であるとされている。そのほか、三谷 (2007) は保育の場における保育者の専門性の根幹に「共感的知性」があるとし、共感性は保育士の専門性の成熟に大きく関連していると指摘している。

これら対人援助を職とする者の共感性に関する先行研究を概観すると、大学生における共感性測定を行った研究のほか、看護職や看護学生を対象に調査された結果が多い。具体的には、教育学部生と経済学部生の共感性を比較検討した研究 (菊池、1988)、看護学生と教育学部生の共感性を比較検討した研究 (白石、1996)、看護学生と人間関係学部生の共感性を比較検討した研究 (林、2002)、看護学生と看護師の共感性を比較検討した研究 (林・河合、2002) などがあげられる。これら先行研究からは、学生と専門職との共感性の差、および学生の所属する学部による群間の比較を行った調査結果が得られている。しかし、研究対象を継続的に扱った縦断的研究ではないため、結果を分析する上で、学生から専門職として職に就くまでの変化を見ることはできない。さらに、看護学生・看

護師という対象が、対人援助職の代表たる職ではあるものの、医療という限られた分野での専門職であり、対人援助職の領域の広さからして、看護職の結果を社会福祉や心理臨床における対人援助職に当てはめることは難しい。近年では、社会学の立場から若年ケアワーカーのワーカホリックを指摘した書籍 (阿部、2007) や、心理学の立場から対人援助を考察した書籍 (望月、2007) が発刊され、対人援助職に関する各分野からのアプローチは行われつつある。しかしながら、社会福祉や心理臨床といった対人援助職の研究は未だ発展途上であると言わざるを得ない。共感性研究では、組織的且つ実証的な研究は未だ途上であり、一貫した結果が得られていないのが現状である。

一方、攻撃性においては、青年期を対象とした研究では犯罪抑止や矯正教育を目的とした研究が多く、非行少年と非行経験のない少年とを比較した研究などが主であり、一般大学生において群間比較を行った研究は見受けられない。

以上のように、対人援助職を対象にした研究結果は一貫していない上に、職業選択がある程度決定し、専門職として働く準備段階にいる大学生を対象にした実証的な研究が見受けられないことを受け、本研究では将来対人援助職を希望する大学生 (対人援助群) と、将来企業において一般職を希望する大学生 (対照群) の 2 群を対象に、共感性および攻撃性の比較検討を行うことを第 1 の目的とする (目的 1)。

また、筆者らは、社会福祉を学ぶ大学生を対象に本研究で用いた情動的共感性尺度および日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙で調査を行い、青年期における共感性と攻撃性の関係を、他者意識という仲介変数をもとに男女比較により検討を行った (蔵岡、2004; 蔵岡・鎌田、2005)。その研究での対象者は本研究と同じ対人援助職を目指す大学生であるが、回答を得た調査協力者は本研究と異なるため、縦断研究とは言えない (後述)。

これらの研究結果からは共感性・攻撃性ともに下位尺度において男女で性差が認められ、情動的共感性では感情的暖かさ、感情的被影響性は男性よりも女性が有意に高い得点を示し、感情的冷淡さは女性よりも男性が有意に高い得点を示した。攻撃性においては行動的側面である身体的攻撃および言語的攻撃において女性よりも男性が有意に高い得点を示し、特性的側面である短気、敵意については有意な差が認められなかった。つまり、情動的共感性では感情的な暖かさや影響の受けやすさという点では男性よりも女性に高く見られる傾向であり、その一方で男性は女性と比較して感情的に冷淡である傾向が高いということであった。また、攻撃性に関しては、行動的側面としての言語的および身体的な攻撃性は女性と比較して男性に見られる傾向であり、特性的側面としての短気や敵意では男女の差はないということであった。

筆者らが行った上記の研究は、調査に用いた質問紙も同一であり、対象の属性も本研究のデータと同種の、対人援助職を目指す大学生である。このように同等の条件で得られたデータであり、本研究で得られたデータとの比較に適していると考えられる。

そこで、本研究のデータ（以降、2005年調査と称する）と筆者らが2003年に調査で得たデータ（以降、2003年調査と称する）とを比較し、情動的共感性および攻撃性の得点が、2群間で変化していないかどうかを検証することを第2の目的とする（目的2）。

具体的には、研究目的は以下のように整理される。

- 目的1 対人援助群と対照群における、共感性および攻撃性の比較。
- 対人援助群と対照群の間では、共感性および攻撃性に差が認められるか。
- また、共感性と攻撃性の関係は群間によって相違点が見られるか。
- 目的2 対人援助群において、情動的共感性と

攻撃性が安定した特性であることを明らかにするため、過去の調査結果との比較。

II 方法・手続き

1. 調査質問紙

調査には質問紙法が用いられた。調査に用いられた質問紙は3つの尺度から構成され、

- (1) 攻撃性を測定する、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井、1999）
- (2) 共感性の情動的側面を測定する、情動的共感性尺度（加藤・高木、1980）
- (3) 多次元的視点から共感性を測定する、多次元共感測定尺度（桜井、1988）からなる。

質問紙の回答形式はいずれも原著に忠実なままで、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤他、1999）、多次元共感測定尺度（桜井、1988）は5件法が用いられ、情動的共感性尺度（加藤・高木、1980）は7件法が用いられた。

2. 調査対象と調査実施

調査実施にあたり、調査対象は研究目的に基づき2つの群に分けられた。すなわち、

- (1) 大学卒業後、社会福祉や心理臨床に関する専門職を希望する学生群（対人援助群）
- (2) 大学卒業後、企業にて一般職を希望する学生群（対照群）

の2群に分けられ、調査が実施された。

まず、(1) 対人援助群の大学として、社会福祉学科、臨床心理学科を学科構成とする大阪府郊外の4年制大学大学生を対象に実施された。有効回答は男性185名（平均年齢18.9歳、標準偏差2.27）、女性238名（平均年齢18.6歳、標準偏差1.52）、性別不明1名の計424名（平均年齢18.7歳、標準偏差1.89）であった。有効回答率は84.8%であった。

次に、(2) 対照群の大学として、経済学部、法学部、経営科学部を主とする大阪府近郊の4

年制総合大学大学生を対象に実施された。有効回答は男性 75 名 (平均年齢 19.92 歳、標準偏差 1.14)、女性 20 名 (平均年齢 19.6 歳、標準偏差 0.76) 性別不明 2 名、の計 97 名 (平均年齢 19.8 歳、標準偏差 1.1) であった。有効回答率は 80.8% であった。

調査は 2005 年 5 月に、大学の講義時を利用して行われた。

調査の実施は、無記名回答方式で集団実施され、質問紙は即時回収された。

3. 尺度の信頼性

尺度の信頼性は、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (安藤他、1999)、多次元共感測定尺度 (桜井、1988)、情動的共感性尺度 (加藤・高木、1980)、以上の各質問紙とも、下位尺度ごとにクロンバック α 係数が算出された。係数の算出には統計パッケージ SPSS 12.0 J の Reliability が用いられた。

Table 1 は、各質問紙において下位尺度ごとのクロンバック α 係数を示したものである。

各下位尺度とも、0.6 から 0.7 程度の α 係数が得られた。またいずれも先行研究で算出された α 係数に準じた結果である。これらのことから、信頼性は一定の水準を保っていることが、内的整合性の観点から明らかにされた。

Table 1 各質問紙における下位尺度ごとのクロンバック α 係数

下位尺度		α
日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙	短気	(5 項目) 0.68
	敵意	(7 項目) 0.69
	身体的攻撃	(7 項目) 0.75
	言語的攻撃	(5 項目) 0.70
情動的共感性尺度	感情的暖かさ	(10 項目) 0.76
	感情的冷淡さ	(10 項目) 0.74
	感情的被影響性	(5 項目) 0.64
多次元共感測定尺度	空想	(7 項目) 0.71
	視点取得	(7 項目) 0.71
	個人的苦悩	(7 項目) 0.71
	共感的配慮	(7 項目) 0.61

4. 2003 年調査の概要

続いて、目的 2 で比較に用いられる 2003 年調査の概要を記す。

調査に用いられた質問紙は日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (安藤他、1999)、情動的共感性尺度 (加藤・高木、1980)、他者意識尺度 (辻、1993) であった。なお、他者意識尺度は本研究との比較対象からは除外された。

調査は社会福祉を学ぶ大阪府郊外の 4 年制大学大学生を対象に実施された。有効回答は男性 81 名 (平均年齢 20.6 歳、標準偏差 2.2)、女性 155 名 (平均年齢 20.0 歳、標準偏差 2.2) の計 236 名 (平均年齢 20.2 歳、標準偏差 2.2) であった。調査は 2003 年 7 月に行われた。

5. 統計分析

統計分析には、統計パッケージ SPSS 12.0 J for Windows (SPSS 社) が用いられた。

III 結 果

結果 1 群間における共感性と攻撃性の下位尺度の比較

対人援助群と対照群の間で、共感性および攻撃性の間に差がみられるかどうかを比較検討した。この比較には t 検定が用いられた。Table 2 は各質問紙における下位尺度ごとの、対人援助群と対照群の t 検定の結果である。

(1) 多次元共感性

共感性を多次元的視点で測定する多次元共感測定尺度においては、空想 ($t = 4.37, p < .001$)、視点取得 ($t = 2.30, p < .05$)、個人的苦悩 ($t = 2.29, p < .05$)、共感的配慮 ($t = 3.47, p < .001$) の全ての下位尺度において、対人援助群が対照群より有意に高い得点を示した。

(2) 情動的共感性

情動的共感性を測定する情動的共感性尺度においては、感情的暖かさは対人援助群が対照群より有意に高い得点を示し ($t = 5.83, p < .001$)、感情的冷淡さは対照群が対人援助群より有意に高い得点を示した ($t = -3.75, p$

Table 2 対人援助群と対照群の t 検定結果

		対人援助群	対照群	t 値
多次元共感測定尺度	空想	24.77	22.38	4.37***
	視点取得	23.37	22.23	2.30*
	個人的苦悩	23.61	22.43	2.29*
	共感的配慮	25.09	23.61	3.47***
情動的共感性尺度	感情的暖かさ	53.80	48.49	5.83***
	感情的冷淡さ	30.45	33.76	-3.75***
	感情的被影響性	22.25	21.56	1.25
日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙	短気	14.63	15.08	-1.00
	敵意	19.02	18.74	0.63
	身体的攻撃	16.17	18.95	-5.10***
	言語的攻撃	14.75	15.63	-2.48*
	総合得点	65.48	68.40	-3.23***

*** $p < .001$, ** $p < .01$

<.001)。感情的被影響性は有意な差が認められなかった ($t = 1.25$, n.s.)。

(3) 攻撃性

攻撃性を測定する日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙においては、下位尺度では身体的攻撃 ($t = -5.1$, $p < .001$)、言語的攻撃 ($t = -2.48$, $p < .05$) および総合得点 ($t = -3.23$, $p < .001$) において、対照群は対人援助群より有意に高い得点を示した。また短気と敵意の各下位尺度については、有意な差が認められなかった (短気 ($t = -1.0$, n.s.)、敵意 ($t = -5.1$, n.s.))。

結果 2 過去の調査結果との比較結果

2005 年調査 (05 年群) と 2003 年調査 (03 年群) の間で下位尺度ごとに t 検定による比

較 (05 年 / 03 年比較) を行った。対象者の属性を統制するため、比較は次の 3 点に分けて行われた。

(1) 対人援助群大学生全体を対象にした 05 年 / 03 年比較

2005 年調査と 2003 年調査の間で下位尺度ごとに t 検定による比較を行った (Table 3)。2005 年調査の分析対象 (05 年群) は、対人援助群として調査された全ての調査協力者 (有効回答者) 424 名であった。

結果、情動的共感性では全ての下位尺度において有意な差は認められなかった (すべて n.s.) が、攻撃性では短気 ($t = -3.40$, $p < .01$)、身体的攻撃 ($t = -2.41$, $p < .05$)、言語的攻撃 ($t = -2.17$, $p < .05$) において有意な差が認めら

Table 3 対人援助群大学生を対象にした 05 年 / 03 年比較 (n=660)

		2005 年	2003 年	t 値
情動的共感性尺度	感情的暖かさ	53.8	53.20	0.92
	感情的冷淡さ	30.5	31.1	-0.96
	感情的被影響性	22.2	23.0	-1.86
日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙	短気	14.6	15.7	-3.40**
	敵意	19.0	19.0	0.03
	身体的攻撃	16.2	17.1	-2.41*
	言語的攻撃	14.8	15.4	-2.17*

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4 社会福祉学科大学生を対象にした 05 年／03 年比較 (n=531)

		2005 年	2003 年	t 値
情動的共感性尺度	感情的暖かさ	53.4	53.2	0.33
	感情的冷淡さ	30.8	31.1	-0.48
	感情的被影響性	22.3	23.0	-1.53
日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙	短気	14.6	15.7	-3.13**
	敵意	19.0	19.0	0.04
	身体的攻撃	16.2	17.1	-2.18*
	言語的攻撃	14.2	15.4	-3.60***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 5 社会福祉学科 19 歳大学生を対象にした 05 年／03 年比較 (n=162)

		2005 年	2003 年	t 値
情動的共感性尺度	感情的暖かさ	53.1	54.3	-1.14
	感情的冷淡さ	30.6	30.8	-0.22
	感情的被影響性	22.2	23.6	-1.85
日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙	短気	14.3	16.0	-2.79**
	敵意	18.4	19.4	-1.63
	身体的攻撃	15.5	17.0	-1.83
	言語的攻撃	14.2	14.9	-1.28

** $p < .01$

れた。

(2) 社会福祉学科大学生全体を対象にした 05 年／03 年比較

上記 (1) では攻撃性の下位尺度において有意な差が認められた。(1) では 2005 年調査の分析対象者は対人援助群の大学生全体 (社会福祉学科、臨床心理学科) を対象であったが、2003 年調査の分析対象者の属性が社会福祉学科の大学生のみであり、有意差の原因に対象の属性の不一致による影響が考えられる。

そこで 2003 年調査の分析対象を社会福祉学科大学生 (295 名) のみに絞り、再度 2003 年調査との比較を行った (Table 4)。2003 年調査の分析対象者は (1) 同様、236 名であった。

結果、情動的共感性では全ての下位尺度において有意な差は認められなかった (すべて n.s.) が、攻撃性では短気 ($t = -3.13$, $p < .01$)、身体的攻撃 ($t = -2.18$, $p < .05$)、言語的攻撃 ($t = -3.60$, $p < .001$) において有意な差が認められた。

(3) 社会福祉学科 19 歳大学生を対象にした 05 年／03 年比較

上記 (2) においても攻撃性の下位尺度において有意な差が認められた。2005 年調査では平均年齢が 18.7 歳、2003 年調査では平均年齢が 20.2 歳と開きがある。対象を厳密に統一するため、(2) よりも分析対象を更に絞り、2005 年調査、2003 年調査ともに 19 歳のみを対象にして比較を行った (Table 5)。2005 年調査の分析対象者は 54 名、2003 年調査の分析対象者は 108 名であった。

結果、情動的共感性では全ての下位尺度において有意な差は認められなかった (すべて n.s.)。一方、攻撃性では短気 ($t = -2.79$, $p < .01$) にのみ有意な差が認められた。

Ⅳ 考 察

群間における共感性および攻撃性の比較（目的1）

（1）多次元共感測定尺度

多次元共感測定尺度においては、空想、視点取得、個人的苦悩、および共感的配慮の、全ての下位尺度において対人援助群が対照群よりも有意に高い得点を示した。

下位尺度のなかで視点取得は、他者との同一視を図り、その他者の立場に立つことができるかという、共感性の認知的側面を測定する尺度である。つまり、これら尺度得点の高い者は眼前に直面する人間や動物に対し、それらが置かれている状況を理解し、さらにそれらの立場に立って物事を把握する傾向がより高く見うけられることになる。また、空想は現実場面以外の仮想状況に対し、感情を移入することや、感情を想像する傾向である。眼前に対象がいなくとも、想像することによって感情移入をできることが、この傾向の高い者の特徴と考えられる。同様に共感的配慮に関しては、下位尺度の名前通り、実際に共感的な配慮を行動として示す傾向を測定したものである。そして個人的苦悩は、通常状況ではない場面において援助が必要とされる際に、その援助について不安や動揺が見られるかを示す指標である。

今回の研究結果では対人援助群は、上記全ての下位尺度について対照群よりも有意に得点が高い結果となった。すなわち、対人援助職を希望する者は一般職を希望する者よりも、他者の視点に立つことや、他者の困難な状況に対し何らかの援助を差し伸べようとするを行いやすい、ということであろう。対人援助職、特に社会福祉現場や心理臨床現場において働く者にとって必要とされる「共感的理解」や「受容」といった資質は、上記のような他者の視点に立つことが前提と考えられるのではないか。

心理臨床の現場のみならず社会福祉の現場でも、虐待の疑いのある子どもを保護すること

や、施設に入所している高齢者の容態急変への対応といった、緊急を要する場面に出会う機会は数多い。特に近年では福祉現場におけるニーズの多様化が顕著であり、利用者に対する臨機応変な対応が福祉従事者には高く求められてきている。

林・河合（2002）によると、個人的苦悩は「相手の苦痛な感情を感じ取ることで自分自身も苦痛になり、自分の苦痛を低減するために援助行動が起こる（Davis, 1994）」というメカニズムによって説明が行われている。つまり、相手の苦痛そのものが自身の苦痛となる訳であり、自身の苦痛を対処し軽減させるために援助行動を起こす、という行動の流れが考えられる。さらに林・河合（2002）は、看護学生よりも現職の看護師は個人的苦悩が低く、更に看護師の経験年数が多い者ほど個人的苦悩が低い傾向にあると報告している。同様に白石（1996）は、類似の尺度が用いられた（共感経験尺度改訂版（角田、1993））ものの、教育学部生よりも看護学生は共感性が低い、と報告している。このように看護師の個人的苦悩が低いという結果は一見、共感的ではないと判断されがちであるが、実際の現場では個人的苦悩が低いにもかかわらず看護師という医療現場の対人援助職に就き、日々職務を果たしている。

つまり、先行研究の結果からは、実際の現場においては共感性が高いということは否定的に受け取られる節があるが、共感性という特性全体ではなく、むしろ個人的苦悩という一側面を低減させることが、現場において的確な対応をするためには必要であるのではないだろうか。そして、この個人的苦悩に関して林・河合（2002）は、共感性の発達とは別個のものであると報告している。しかし、共感性の発達の意味においては、個人的苦悩も Davis（1994）が構築した共感性の1つの要素および下位尺度であり、他の3つの保持同様に、個人的苦悩の低減が必要とされるであろう。

(2) 情動的共感性尺度

情動的共感性においては、感情的暖かさについては対人援助群が対照群よりも有意に高い得点を示し、感情的冷淡さについては対照群が対人援助群よりも有意に高い得点を示した。感情的冷淡さ尺度は得点が高いほど冷淡であり、共感的でないという、下位尺度自体が逆転項目であるため、対人援助群が対照群よりも感情的に冷淡でない、という結果と解釈できる。すなわち、情動的共感性の対人援助群の高さが示されたと考えられるであろう。

育児相談者を対象に情動的共感性を調査した清水 (2003) によると、大学生を対象に調査を行った加藤・高木 (1980) の結果と比較し、育児相談者という専門職業集団の情動的共感性の高さを挙げ、職業と共感性との関連を指摘している。この点については、本研究での対人援助群の情動的共感性尺度得点の高さと一貫した結果といえるのではないか。よって、心理臨床領域や社会福祉領域においては情動的共感性に関しても尺度得点の高い傾向、つまり情動面での共感性の高さが見受けられるであろう。

多次元共感測定尺度の検討では、下位尺度のうち、対人援助群における個人的苦悩の高さについて論じた。そして情動的共感性尺度からは、対人援助群の感情的冷淡さが低い、すなわち感情的に冷淡でないという結果が得られた。この結果は前項同様、対人援助職にとっての共感性は、共感的ではない部分も存在するとも受け取れるであろう。

(3) 攻撃性

日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の結果からは、対人援助群と対照群の間において、短気および敵意では群間の違いは認められなかったが、対人援助群は対照群よりも身体的に攻撃する傾向および言語的に攻撃する傾向が低い、という結果が得られた。

安藤他 (1999) は、BAQ で測定される攻撃性について、“個人の持つ性格傾向としての‘短気性’、持続的態度的傾向としての‘敵意

性’を内包し、加えて表出的な行動傾向としての‘身体的・言語的攻撃性’を含んだ、総合的な攻撃性の強さを測定しようとするものである (p. 389)”と説明している。つまり、BAQ で測定された攻撃性は、短気や敵意という攻撃性の特性的側面と、身体的や言語的といった行動的側面の 2 側面に区分される。

本稿のはじめに論じたとおり、攻撃性は生得的な特性とされる (例えば、Daly & Wilson, 1988)。そして対人援助職にとって、攻撃的であることが望まれないことは言うまでもないことである。しかしながら攻撃性が生得的であるがゆえに、時として攻撃的な情動や認知を行うことは避けられない。

本研究の結果では、攻撃性の情動や認知といった特性的側面に関しては、対人援助群と対照群では違いは見受けられなかった。この結果から、一般職を希望する学生との比較では、対人援助職を希望する学生においても、眼前にある出来事に対し攻撃的な認知を抱いたり、攻撃的な情動を発したりする傾向が必ずしも低いという訳ではない、と考えられるであろう。だが、これら情動や認知面において攻撃的であったとしても、身体的であるか言語的であるかを問わず、実際の攻撃行動へと結びつく傾向は低いと考えられる。安藤他 (1999) が論じた通り、対人援助職を希望する学生の資質というものは 2 つの側面に分けられるのか、今後更なる検討が必要とされる。

つまり、対人援助職を希望する学生は、特性面においては一般職を希望する学生と同様の攻撃性であり、攻撃が行動として喚起されるかという点においてのみ、その傾向の低さが認められた。したがって、対人援助職を希望する学生の攻撃性全体が低いというのではなく、行動的側面でのみ攻撃性が低いと考えられるだろう。

加えて、生得的な資質としての攻撃性は、ヒトにとって存在するものであり、短気、敵意が具体的行動に向かう情動の高まりは、対人援助職においてもみられることは必然である。それ

故に対人援助職にとっては、この情動の高まりが具体的行動と結びつかないための、攻撃性をコントロールする資質が必要とされるのではないだろうか。

過去の調査結果との比較（目的 2）

過去の調査結果との比較では、情動的共感性においては 2005 年調査と 2003 年調査の間には、下位尺度全てにおいて有意な差は認められなかった。そして攻撃性については、下位尺度の短気へのみ有意差が認められたが、他の下位尺度には調査間の変化が見られないという結果であった。

過去の調査結果との比較を行った目的は、対象が広範囲である対人援助職において、より安定した特性としての共感性および攻撃性を検討するためである。

そして、共感性においては調査間の変化が見られず、攻撃性に関しては一部の下位尺度（短気）で有意な差が見られたものの、群間の変化は些少であると考えられる。この結果から、社会福祉領域における対人援助職を希望する学生の共感性と攻撃性は、概ね安定した特性であると推察される。

しかしながら、先述のとおり対人援助職という対象は本研究で対象となった社会福祉領域や心理臨床領域のみならず、医療領域や保育領域、教育領域も含まれた広範囲なものである。また、先行研究においては、現職の対人援助職と学生との群間比較（林・河合、2002）や、限定された対人援助職の対象であっても、調査対象内での得点の高低による検証（清水、2003）に留まっており、より広義の対人援助職の共感性や攻撃性の安定性を、実証的に検討した研究は見受けられない。本研究では、対人援助職のうち社会福祉領域および心理臨床領域に限定されるものの、実証的なデータに基づく検討を行い、対人援助職を希望する学生の共感性および攻撃性の安定性が推察された。

上述したように、対人援助職という大きな対

象において、より安定した共感性や攻撃性特性を見いだすには、今回の研究よりも対象の属性を増やし、対人援助職を包括する共感性および攻撃性の安定性がみられるのか、または逆に対人援助職の領域によって異なった結果がみられるのかを検証することが必要と思われる。さらに、本研究での比較対象は、社会福祉を学び、将来対人援助職を希望する学生を対象にしており、本研究の結果のみで対人援助職の共感性および攻撃性の安定性を呈示できたとは言い難い。

このような点を解決し、対人援助職の共感性および攻撃性の安定性を明らかにすべく、社会福祉領域および心理臨床領域での、現職の対人援助職を対象とした検討が望まれるであろう。

付記

本稿は第一著者が 2005 年度に関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。

調査にご協力くださった、学生の皆様に御礼申し上げます。また、データ入力には、関西福祉科学大学亀島研究室 2006 年度卒業生の磯崎 愛さん、請田 瞳さんに協力いただきました。ここに記して御礼申し上げます。

なお、研究の一部は日本発達心理学会第 16 回大会（神戸大学、2005. 3. 28）および第 17 回大会（九州大学、2006. 3. 20）にて発表された。

文 献

- 阿部真大（2007）. 働きすぎる若者たち―「自分探し」の果てに―NHK 生活人新書、日本放送出版協会。
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大 声 治・坂井明子（1999）. 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究、70, 384-392.
- Daly, M., & Wilson, M. (1988). *Homicide*. New York: Aldine. (長谷川眞理子・長谷川寿一（1999）. 人が人を殺すとき―進化でその謎をとく 新思索社.)

- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Brown & Benchmark. (菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学 川島書店.)
- 橋本秀美 (2005). 肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発 心理臨床学研究、22, 637-647.
- 林 智子 (2002). 看護学生の共感性と関連要因の検討—女子大学生との比較から—看護教育、43, 580-585.
- 林 智子・河合優年 (2002). 看護学生から看護師への共感性の発達 (第 1 報): 共感尺度得点からの検討 看護研究、35, 453-460.
- 角田 豊 (1993). 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理学研究、42, 193-200.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究、2, 33-42.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル 川島書店 pp. 62-71.
- 三谷大紀 (2007). 保育の場における保育者の育ち—保育者の専門性は「共感的知性」によってつ
くられる 佐伯 胖 (編) 共感—育ち合う保育のなかで—ミネルヴァ書房 pp. 109-154.
- 望月 昭 (編) (2007). 対人援助の心理学 朝倉心理学講座第 17 巻、朝倉書店.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係 奈良教育大学紀要 (人文・社会) 37, 149-153.
- 齋藤耕二・登張真穂 (2003). 青年期における共感性の発達 白百合女子大学研究紀要、38, 105-120.
- 清水嘉子 (2003). 育児相談者の援助と情動的共感性 母性衛生、44, 431-441.
- 白石裕子 (1996). 看護学生と教育系学生における共感性の比較—共感性尺度を使用して—看護教育、37, 734-738.
- 蔵岡幸一 (2004). 青年期における共感性と攻撃性の関係 関西福祉科学大学卒業論文 (未公開).
- 蔵岡幸一・鎌田次郎 (2005). 青年期における共感性と攻撃性の関係—他者意識を仲介変数にした検討—日本発達心理学会第 16 回大会発表論文集、600.